

# 助動詞キ・ケリが示す「体験性」の差異について

——付、大鏡における公事・私事の錯綜——

加 藤 浩 司

## 序、問題点の確認

私は古代語におけるいわゆる「過去（回想）」の助動詞キ・ケリについて、その意味・機能の差異を明らかにすべく、これまでに五つの文献について調査を行なった。<sup>注二</sup> その結果としてキは、表現主体が生起時に直接見聞した事象を発話時にも自己の記憶に明確に保持されているものとして述べるのに用いられる、と考えられた。対してケリは、後になってからその後の状況によって気付いたり、また推定したり、また他人からの伝聞によって知ったりした事象を、発話時の表現主体にとって自身で直接その事象が生起するのを見聞したという明確な記憶のない、何らかの間接的に認識した事象として述べるのに用いられる、と考えられた。

しかし、こうした差異は原則としてほぼ認めてもよいといった程度であり、調査では表現主体の直接見聞した事象か否かに関して不明な場合の用例や、また少なからず例外的用例も見られた。第一に、表現主体にとって直接見聞することが不可能な遠い過去の事象でも、それが表現主体（及び仮想された享受者）にとって実際にあった（歴史的・宗教的）事実として信すべき場合、キによって述べることも許されるという用例があった。これは複数の文献にまたがって

現われ、文献の性質を超えて一般的に行なわれていたキの用法だと思われた。第二に、各文献の性質によって生じたと思われる例外的用例があった。詳細は拙稿に述べたので繰り返さないが、例えば蜻蛉日記地の文における多くのケリの用例は明らかに表現主体自身の直接見聞した事象を述べたものであるが、これらは時間的距離による表現主体の明確な記憶の消失という自然の原因・読者に対する表現主体の気兼ねという作爲的な理由等によって生じたと思われるのである。

ただし、原則に反する用例を文献の特殊な性質によって説明するのでは、この原則自体の有効性を証明する手立てとして充分な説得力を持ち得ない。つまり、キ・ケリの差異を原則として前述のように認める私の立場からなら、それに対する反例をその文献における表現主体の特殊な叙述態度によって説明することで自説の擁護ができるが、私とは別のキ・ケリの機能の差異を認める立場からでも、それらの立場なりに反例の生ずる要因を文献の特殊性等から説明できる可能性があり、そうした立場を異にする論者をも充分に説得できるような、普遍性を持った主張ではないのである。<sup>注三</sup>

そこで本稿では、全編がほぼ登場人物の会話部分で占められ、ある事象が表現主体の直接見聞したものか否かが判定しやすいと考えられる大鏡を資料として、表現主体の特殊な叙述態度等の説明原理

を用いず、虚心に前述したキ・ケリの機能の差異が認められるのかどうか検証することを試みたい。

一、大鏡におけるキの用例

大鏡は、「紫野雲林院の菩提講の場に百九十歳の大宅世次と、百八十歳の夏山重木という両翁が行き会ひ、これに重木の妻と若侍とが加わり、講の始まる前の一時を利用して、世次の翁が主として歴史を語り、他の三人が聞き手となって相槌を打ったり、補足したり、異見―世次の説とは別な―いわゆる真相談などをはさんだりするのを、傍で筆者なる人が聞いていて書き写したものが本書であるという趣向をとっている」<sup>(注三)</sup>ため、時枝誠記氏のいう「主体」「場面」「素材」といった言語成立の三条件<sup>(注四)</sup>が把握しやすい戯曲的な形式となっている。そして、この点で、助動詞キ・ケリの用例にしてもそれが表現主体の直接見聞した事象を述べるのに用いられているか否かが判明しやすい場合が多いのである。

本稿では、前稿でのキ・ケリの用法上の分類をそのまま踏襲するのではなく、こうした好条件を踏まえて、「表現主体の直接見聞した事象の叙述であるか否か」だけを基準として分類し、細かく―①確実に直接見聞した事象と言える用例②直接見聞した事象と考えた方が適切な用例③どちらか不明④伝聞など間接的に認識した事象と考えた方が適切な用例⑤確実に伝聞などで間接的に認識した事象と言える用例―の五段階に分けることにした。またその際、キについては喩え話などで論理的に仮定した過去を表わす場合や連語として用いられる場合、ケリではいわゆる「気付き」や「詠嘆」として用いられる場合など、単に「直接見聞した事象」か「間接的に認識し

た事象」かだけでは分類できない用例もあるので、これらについては別に扱うことにした。

大鏡の本文としては松村博司氏校注の岩波日本古典文学大系本所収の東松本に拠った（ただし、第一九刷で補訂後の版のもの）。調査に際しては、大鏡の本文全体を表現主体の別により、地の文（表現主体は筆録者）・世次の話・重木の話・若侍の話・重木の妻の話・その他の某人の話・二重引用による登場人物の会話及び心中思惟（世次等の話の中で引用されているもの、また表現主体自身の心中思惟で「〜と」などによって引用部分と認められるものも含む）・和歌（世次等の話の中で引用されているものも含む）の八種類に分けた。

まず、助動詞キの用例を、分類した用法別に集計し、結果を（表一）に示す。

（表一）大鏡のキの用例（岩波古典大系本に拠る）

用法／本文	地	世次	重木	若侍	重木妻	某人	会話等	和歌	計
確実な直接体験	三	一八九	七	※a 二〇	七	※b 一	九	二	三九四
直接体験適當		四六六	三六	一			四		五三七
不明		一八九	八						一九七
間接体験適當		九	一	一					二
確実な間接体験		※c 三		二					三
論理的過去等		九						二	二二
計	三三	九二四	二一九	一四	七	一	八三	一三	二七四

表の注 ※a 相手の直接体験した事象に対する問い掛け五例を含む。

※b 相手の直接体験した事象に対する問い掛け一例。

※c このうち十例は登場人物の会話部分の二重引用が世次の会話と

混交したものと考えられ、そう見れば「会話等」の内の「確実な直接体験」の用例とできる。また、別の一例は東松本における江戸期の補写部分の用例であり、平松本では該当箇所はケリとなっている。

(表一) について具体的な用例を示しながら説明する。最初の「確実な直接体験」は

(重木)「太政大臣殿にて元服つかまつりし時、『きむぢが姓はなにぞ』とおほせられし<sup>レ</sup>かば、『夏山となん申』と申しを、やがて重木となんつけさせたまへりし<sup>レ</sup>」などいふに、いとあさましうなりぬ。<sup>(注五)</sup>

(一―序、三六ページ)

のように、表現主体自身の過去の体験であることが文脈から確実であるものや、

世次、「(中略)又の日、『けふは、御ほとけなどちかうておがみたてまつらん、ものどもとりをかれぬさきに』とおもひて、まいりて侍しに、みやたちの諸堂おがみたてまつらせたまひし、みまうし侍りしこそ、かかる事にあはんとていままでいきたるなりけりと、おぼえ侍しか。(中略)御てぐるまに、四所たてまつりたりしぞかし。くちに太宮・皇太后宮、御袖ばかりをいささかさし<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ださせ給て侍りしに、枇杷殿の宮の御ぐしの、つちにいとながくひかれさせ給てい<sup>レ</sup>ださせ給へりしは、いとめづらかなりしことかな。<sup>(注六)</sup>

(以下略) (五―藤氏物語、二四三ページ)

のように、表現主体自身がその事象を直接見聞したのだと明確に言及したうえで述べている事象に用いられた用例である。この例では、「みやたちの諸堂おがみたてまつらせたまひし、みまうし侍し」という言及から、「たてまつりたりし」「さし<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ださせ給て侍りし」

「い<sup>レ</sup>ださせ給へりし」「めづらかなりし」といった事象全てを確実に世次自身の直接見聞(体験)したことでであると読み取ることができる。

また、

(侍)「いと<sup>レ</sup>かばかりの御としどもをば、相人などに相せられやせし」ととへば、(重木)「さる人にもみえ侍らざりき。(以下略)」

下略)

(六―昔物語、二七九ページ)

のように、表現主体が、相手が直接体験したと思われる事象について問い掛ける場合の例についても、相手の立場において直接体験であることが確実な事象をその立場に立つて表現したものと言えるので、これに含めた。

次の「直接体験適当」は、文脈から表現主体の直接体験した事象を述べたものだ<sup>と</sup>判断すべきであると考えられるものの、前後の文章などに確実な証拠となる表現が見つけられないものである。この中には例えば、

(世次)「さて、式部卿のみやと申は、故一条院の一のみこにおはします。その宮をばとしごろ帥宮と申ししを、小一条院式部卿にておはしまし<sup>レ</sup>が東宮にたち給てあく所に、帥をばのかせ給て、式部卿とは申ししぞかし。そののちのたびの東宮にもはづれ給て、おぼしなげきしほどにうせ給に<sup>レ</sup>のち、又この小一条院の御さしつぎの二宮敦儀親王をこそは式部卿とは申めれ。<sup>(注七)</sup>

(以下略)

(二―師尹(小一条院)、一一一ページ)

などのように、天皇をはじめとする皇族・后妃、大臣等上級貴族などの動静―呼び名を何といったか、誰の子女か、生死や経歴、その子女は誰かなど―を述べる場合については、それらがほぼ当時の平安貴族社会における世間的事実として、特に表現主体が直接見聞し

たかどうか—たとえばこの例で世次自身式部卿宮が亡くなった現場を見たのかどうか—には関わらず、いわば「同時代者の直接体験」として意識していると考えられるため、こうした用例についてはほとんどを「直接体験適当」とした。ただし、この例でも、「おぼしなげきしほどに」のように必ずしも世間一般にそうと認められていたかどうか疑問が感じられるものについては、次の「不明」に分類した。

その「不明」については、どちらか判断しかねるものであるが、例えば、

この大臣（藤原良相のこと、加藤注）の御女子の御事よくしらず。一人ぞ水尾の御時の女御。男子は、大納言常行卿ときこえし。御子二人おはせしも、五位にて典薬助・主殿頭などいひて、いとあさくてやみ給にき。

（二―良相、世次の会話部分、六七ページ）

という例など、藤原常行は世次の生まれた西暦八七六年の前年に死去している<sup>（注八）</sup>ので、「大納言常行卿ときこえし」というキの用例は「間接体験適当」に分類できたが、次の常行の「御子二人」の経歴を述べたキについては、世次が「同時代者の直接体験」としてでも認識したか否かについてなお不明であり、結局「不明」に分類せざるを得なかった。このように、時代的に不明となる例がいくつかあった。

また、述べられている事象が特に公的な事実という程ではないが、それに準ずるかと思われるもの（先の「そののちのたびの東宮にもはづれ給て、おぼしなげきしほどに」といった例など）もあった。さらに個別の事象について述べたものでも、

その関白殿は、はらはらに男子・女子あまたおはしましき。い

まのきたのかたは、大和守高階成忠のぬしの御女なり。のちに高二位とこそいひ侍しか。さて積善寺の供養の日は、この入道殿のかみにさぶらはれしは、いとめだうなりしわざかな。そのはらに、おとこぎみ三所、女ぎみ四所おはしましき。（以下略）（四―道隆、世次の会話部分、一七八ページ）

の「積善寺の供養」の席次について述べた部分のように、前後に参照すべき文脈もなく言及されているものについては、やはり「不明」とせざるを得なかった。

次の「間接体験適当」の用例は、

（醍醐帝の皇女康子は、加藤注）二代のみかどの御いもうとおはします。さて内ずみしてかしばかれおはしまししを、九条殿は女房をかたらひて、みそかにまいりたまへりしぞかし。よの人便なきことに申、村上のすべらぎもやすからぬことにおぼしめしおはしましけれど、（以下略）

（三―公季（康子内親王）、世次の会話部分、一六二ページ）

のように、おそらく世次も噂から知ったであろうと思われ、かつあまり公的でもない出来事を述べた場合<sup>（注九）</sup>の例である。

次の「確実な間接体験」は、時代的に見て明らかに直接表現主体が見聞したとはできないものである。たとえば

高市皇子は、大臣ながらうせ給にき。

（一―大臣序説、世次の会話部分、六二ページ）

といった例など、奈良時代の出来事である。また、（表一）の注に述べたが、二重引用による登場人物の会話部分と世次や重木の会話とが混交して、世次なり重木にとっては明らかに伝聞した事象であるものをキで述べた用例がある。

帥殿に天下執行の宣旨くだしたてまつりに、この民部卿殿の、

頭弁にてまいりたまへりけるに、御やまひいたくせめて、御装束もえたてまつらざりければ、御直衣にて御簾のとにゐざりいでさせたまふに、なげしをおりわづらはせたまで、女装束御手にとりて、かたのやうにかづけさせ給しなん、いとあはれなりし。こと人のいときばかりなりたらんはことやうなるべきを、なをいとかはらかにあてにおはせしかば、やまひづきてしもこそかたちはいるべかりけれとなんみえしとこそ、民部卿殿はつねにのたまふなれ。

(四―道隆、世次の会話部分、一七八ページ)  
 という例など、「民部卿(俊賢)」の会話部分がどこから始まっているのか明らかでなく、松村氏は引用符号を加えていない。少なくとも「〜となんみえし」という部分は会話部分と思われるので、このキは会話として「確実な直接体験」としたが、その前の「かづけさせ給し」「あはれなりし」「おはせしかば」については世次の会話として「確実な間接体験」に分類して集計してある。こうした用例は十例あった。さらにこれらとは別に、

弘徽殿の御文の、日比やりのこして御めもえはなたず御らんじけるをおぼし出て、「しばし」とて、とりにいらせおはしまししかし。あはた殿の、「いかにおぼしめしならせおはしましぬるぞ。ただいますぎば、をのづからさきはりもいままうできな」と、そらなきし給けるは。

(一―花山院、世次の会話部分、五二ページ)  
 という用例は、東松本における江戸期の補写にかかる部分であり、同じ古本系の平松本では該当箇所が

「しばし」とて、取りに入りおはしましけるほどぞかし、粟田殿の、「(中略)」と、そら泣きたまひけるは。

(橘健二氏校注の小学館日本古典文学全集本、六三ページ)  
 のようにケリになっているので、確実なものではない。

最後の「論理的過去等」は、

御母后、清和帝よりは九年の御あねなり。廿七と申し年、陽成院をばうみたまつりたまへるなり。

(一―陽成院、世次の会話部分、四三三ページ)  
 のごとき例である。陽成帝誕生は西暦八六八年で世次の生まれる八年前だが、母后の高子は九百十年まで存命していたので、世次にあって同時代の人である。世次にとってその人が「廿七と申し年」は論理的に確実に過去に存在していたはずであるから、こうした表現をとらせたのであると考えられる。またこの他に「すぎにしかた(過去の意)」「(四―兼家、一六八ページ)のように連語化して用いられたものもこれに含めた。

以上全ての用法について説明した。結果を百分比(小数点以下第三位四捨五入)で見ると、

「確実な直接体験」	全体の三三・五六パーセント
「直接体験適当」	四四・八九
「不明」	一六・七八
「間接体験適当」	〇・九四
「確実な間接体験」	二・九〇(内混交と補写〇・九四)
「論理的過去等」	〇・九四
百分比単純合計	一〇〇・〇一

となる。「確実な直接体験」と「直接体験適当」を合わせると七八・四五パーセント。対して「確実な間接体験」「間接体験適当」両者合わせても三・八四パーセントであり、しかも引用部分との混交の例が十例、補写による疑問例が一例あるため、それを除けば二・

九〇パーセントとなる。これらの比率から、大鏡において、助動詞キは「直接体験」の叙述との結び付きが強く、逆に「間接体験」の叙述との結び付きは極めて弱いと言えるだろう。

## 二、大鏡におけるケリの用例

次に、同様にケリの用例について分類した結果を(表二)に示す。

(表二) 大鏡におけるケリの用例 (岩波古典大系本に拠る)

用法／本文	地	世次	重木	若侍	重木妻	某人	会話等	和歌	計
確実な直接体験	二						※a 六		八
直接体験適当		三	三						二四
不明		七	一						七四
間接体験適当		四三	三	一			一		四三八
確実な間接体験	五	二七	八	三〇		一	七		三三三
追認等		一五				一	四六	一六	八〇
計	七	七四	三	三		二	六三	一六	九七

表の注 ※a このうち四例は登場人物の会話部分の二重引用が重木の会話と混交したものと考えられ、そう見れば「重木の話」の内の「確実な間接体験」の用例とできる。

最初の「確実な直接体験」は、文脈から、表現主体が明らかに直接見聞した事象について述べている、とできるものである。例えば「(前略) やがて重木となんつけさせたまへりし」などいふに、いとあさましうなりぬ。たれもすこしよろしきものどもは、み

をこせ、ゐよりなどしけり。(一―序、地の文、三六ページ)  
という例など、その場で筆録者自身が見た出来事であると読み取り得る。ただし、(表二)の注に述べたように、

(重木)「これはまことのをやにもそひ侍らず、他人のもとにやしなはれて、十二三まで侍りしかば、はかばかしくも申さず。ただ、(重木ノ養父)『我は子うむわきもしらざりしに、主の御つかひにいちへまかりしに、又わたくしにも銭十貫をもちて侍りけるに、にくげもなきちごをいだきたる女の、『これ人にはなたんなんおもふ。(中略)』といひはべりければ、このもちたる銭にかへてきにしなり。(重木ノ養父)『姓はなにとかいふ』ととひ侍りければ、(女)『夏山』とはましける』。さて、十三にてぞおほき太殿にはまいり侍りし」などいひて。

(一―序、三七ページ)  
(注十二)

という部分の四例のケリについては、松村氏の引用符号に従って重木の養父の会話部分として「確実な直接体験」の用例として分類したけれども、養父が子に向かって語った会話の直接的な引用にしては、「もちて侍りけるに」「いひはべりければ」「とひ侍りければ」などと丁寧の補助動詞「侍り」を用いているのが不審である。この「侍り」は話し手重木の聞き手若侍に対する敬意の現われであり、ここはむしろ重木の立場からの間接話法的な叙述が混交したものと見るのがよいのではあるまいか。そう考えればこれは重木の話で「確実な間接体験」とでき、この「確実な直接体験」の用例は四例のみとなる。

次の「直接体験適当」は、第一にキの用例に関して述べた「同時代者的直接体験」に当たると思われる事実がケリで述べられているものである。

(冷泉院が、加藤注) 寛弘八年十月廿四日、御年六十二にて、うせさせおはしましけるを、三條院くらゐにつかせ給年にて、大嘗會などののびけるをぞ、「おりふし」と、よの人申ける。

(二) 冷泉院、世次の会話部分、四九ページ

寛弘八年は西暦一〇一一年であり、この菩提講の年(万寿二(一一〇二五)年とする通説に従う)の十四年前、上皇の死去という出来事も公的な事実であり、世次にとって「同時代者的直接体験」として意識されていても当然であろう。第二に、「確実な直接体験」を述べている直前・直後などに用いられている例である。

それに又、冷泉院の、御くるまのうちより、たかやかに神樂うたをうたはせたまひしは、さまざまけうあることをもみきくかなと、おぼえ候し。あきのぶのぬしの、「庭火いとまうなりや」とのたまへりけるにこそ、万人えたはず、わらひたまひにけれ。

(三) 伊尹(花山天皇)、世次の会話部分、一四九〜一五〇ページ

「さまざまおぼえ候し」とあるから世次自身見聞していた出来事であることがわかるが、その直後に高階明順の洒落のことがケリで述べられている。この後はまた別の出来事に話が移っているのだ、この明順の一件についてはこれだけから判断するしかない。これだけは直接見聞きしたのではなく、後になって他人から聞いて知ったのだという可能性がないわけではないが、一応、「直接体験適当」に分類しておく。以上が「直接体験適当」の用例の代表的なものである。

次の「不明」は要するにどちらとも考えられ、判断する決め手のないものである。例えば、

(仲平の大臣新任の) ひさしの大饗させ給けるにも、よこぎまにすへまいらせさせたまひけるこそ、年ごろすこしかたはら

いたくおぼされける御心とけて、いかにかたみにこころゆかせたまへりけんと、御あはひめでたけれ。

(二) 仲平、世次の会話部分、八二ページ

の「大饗させ給ける」「すへまいらせさせたまひける」は世次がその場に居合わせて見聞したとも後日他人から聞いて知ったともどちらとも考えられるのである。

その次の「間接体験適当」は、

この大納言殿、無心の事一度ぞのたまへるや。御いもうとの四条宮の、后にたち給て、初て入内し給に、洞院のぼりにおはしませば、東三條のまへをわたらせ給に、大入道殿も故女院もむねいたくおぼしめしけるに、按察大納言は後の御せうとにて、御心ちのよくおぼされけるまに、御馬をひかへて、「この女御は、いつか后にはたち給らん」と、うちみいれて、のたまへりけるを、殿をはじめたてまつりて、その御ぞうやすからずおぼしけれど、をのこ宮おはしませば、たけくぞ。

(二) 頼忠(公任)、世次の会話部分、九三〜九四ページ

のように、個別のエピソードであって、しかも人物の心理などに立ち入った描写を行なうなど極めて私的な事柄に関してまで述べている部分の用例である。確実に伝聞したことだと断定はできないが、当事者でなければ直接体験できない私的な事象(心理状態)まで叙述が及んでおり、「間接体験適当」として問題はないであろう。

次の「確実な間接体験」は、第一に事象自体が当事者以外体験不可能だと思われるものである。表現主体以外の人物が見た夢の中の描写とか、誰かが都を遠く離れた他国で行なった行為を述べたものとかである。第二に、時代的に表現主体にとって直接見聞することが不可能な場合である。これら二類については特に例を挙げて解説



しない。第三にそれが伝聞した事象であることを前後の叙述で表明している場合である。

(三條院は)もとより御風おもくおはしますに、醫師共の、「大小寒の水を御ぐしにいさせ給へ」と申ければ、こほりふたがりたる水をおほくかけさせたまけるに、いといみじくふるひわななかせたまで、御いろもたがひおはしましたりけるなむ、いとあはれにかなしく人々みまいらせけるとぞ、うけ給はりし。

(一一三條院、世次の会話部分、五五〇五六ページ)  
「とぞ、うけ給はりし」とあるため、このエピソードが明確に伝聞したとだとわかる。第四に、これに準じ、「とぞ」「とぞ」「とぞ」などの助詞によって伝聞したものとわかる場合である。次の例を示しておく。

まことにや、御心ばへなどのいとおちぬずおはしければ、かつは宮もうとみきこえさせたまへりけるとかや。

(四―道隆、世次の会話部分、一七九ページ)  
第五に「けるにや」などとあつて表現主体が推定している事象であることが認められるものである。例えば、

その御はらに、男子一人・女二人おはしまししを、おとこぎみは、重家の少将とて、こころばへ有識に、世おほえをもくてまじらひ給しほどに、ひさしくおはしますまじかりければにや、出家してうせ給にき。

(三―兼通、世次の会話部分、一五六ページ)  
という例など、「ひさしくおはしますまじかりければにや」というのは話し手世次自身の話している時点での推定であり、推定を通じて間接的に認識に至った事柄として広い意味で「間接体験」に含められよう。細かく見て以上の五種類が「確実な間接体験」の用例の

内容である。

最後の「追認等」は、

おぼしきこといはぬは、げにぞはらふくるる心ちしける。かかればこそ、むかしの人は、ものいはまほしくなれば、あなをほりてはいひいれ侍りけめと、おぼえ侍り。

(二―序、世次の会話部分、三五ページ)  
のように、表現主体がある事象の生起・成立に遅れて、後になってから(それが発話時であるかのように表現することが多いが)それを認識したことを表現する場合に用いられるケリ、いわゆる「気づき」のケリである。この例では、昔から「思っていることを言わないのは腹に何か詰まっているような気がする」という諸人に共通する事実―普遍的真理―を表現主体が今になってやっと認識したと表現しているわけである。過去において認識していなかった事象を後(発話時)になって初めて認識したという表現であるから、その事象は発話時点の表現主体にとって明確に記憶に保持された事象ではなく、その意味では「直接体験」ではない。しかし、客観的に見れば表現主体自身がその事象を直接見聞したり、直接体験したりする場合が多い。この例でも、世次自身が「はらふくるる心ち」がしたのである。このようにこの「追認」という表現で述べられている事柄は単純に表現主体の直接体験した事象であるか否かという基準では判別しがたい。この種の用例を別扱いするのも本稿では仕方ない処置と言えるだろう。

以上ケリの用例の分類方法について具体的に説明した。結果を百分比(小数点以下第三位四捨五入)で見ると、

「確実な直接体験」 全体の〇・八六パーセント(内混交〇・四



「直接体験適當」 二・五九  
「不明」 七・九八

「間接体験適當」 四六・一七

「確実な間接体験」 三三・七六

「追認等」 八・六三

百分比単純合計 九九・九九

となる。「確実な直接体験」と「直接体験適當」を合わせても三・四五パーセント、さらに二重引用との混交を除くと三・〇二パーセントにしかない。対して「確実な間接体験」「間接体験適當」両者で七九・九三パーセントに達する。この比率から、大鏡において、ケリという助動詞は「間接体験」の叙述と結び付きが強く、「直接体験」の叙述とは結び付きが極めて弱いと言えるだろう。

### 結、大鏡におけるキ・ケリの機能の差異

以上の結果から、大鏡において、キという助動詞は表現主体の直接見聞した事象、及び表現主体が同時代者として認識した当時の社会一般に流布していた公的事実を述べるのに用いられ、ケリという助動詞は表現主体が伝聞した事象、及び推定した事象つまり間接的に認識した事象―を述べるのに用いられていることが、原則として認められると思う。

こうした原則を認めるならば、調査・分類の段階で「不明」とせざるを得なかった用例についても、キで述べられている事象は表現主体が直接見聞したものであり、ケリで述べられているものは伝聞なり推定なりで間接的に認識したものである可能性が高い。結局、「不明」の用例のキ―十六・七八パーセント、ケリ―七・九八パー

セントという比率は、それぞれ右の原則を強化こそすれ、その反例となるものの比率ではありえないのである。

### 付、大鏡における公事・私事の錯綜

大鏡という文献を資料としてキ・ケリの意味・機能の差異を明らかにするという本稿の課題に対しては、以上のように解答が与えられたものとし、最後に大鏡における叙述事象の種類と、それを述べるのに用いられる助動詞キ・ケリの別について、私見を述べておきたい。

最初に（表三）を示し、以下これを解説する形で述べることにする。

（表三）大鏡における叙述事象の種類と使用されるキ・ケリとその用法

叙述事象の種類	使用	その用法
前時代 間接体験 (伝聞)	キ	疑いない事実の表現
歴史的・宗教的事実	ケリ	伝聞過去・推定過去
個別的・私的事象		
同時代 直接体験 (目撃)	キ	直接体験の記憶
社会的・公的事実		
個別的・私的事象		
間接体験 (伝聞)	キ	同時代者の直接体験の記憶
社会的・公的事実	ケリ	伝聞過去・推定過去
個別的・私的事象		

最初の「疑いない事実の表現」とは、表現主体にとって目撃不可能な遠い昔の出来事であっても、それが歴史的・宗教的に、事実であるとして自身や世間の人々一般にとって信じられている場合、キを用いて述べるといえるものである。大鏡では、

みかど奈良におはしましし時に、鹿嶋とをしようと、大和國三笠山にふりたてまつりて、

(五―藤氏物語、世次の会話部分、二三三ページ)

おはかたよのはじまりは、人の壽は八万歳なり。それがやうやう減じもていき、百歳になる時、ほとけはいでおはしますなり。されど、生死のさだめなきよしを人にしめし給とて、なをいま二十年をつづめて、八十と申しとし、入滅せさせ給ひにき。

(六―昔物語、世次の会話部分、二七八ページ)

などに見られる。

次の「伝聞過去・推定過去」と最後の「伝聞過去・推定過去」は同じ用法である。前時代か同時代かに関係なく、表現主体が直接見聞したのではなく、伝聞などによって知った事柄で、しかも個別的・私的なものを、ケリを用いて述べるものである。大鏡において世次等により語られる個別的・私的な事実・事件のうちケリによって述べられているものは、原則的に、全て伝聞や推定によったものであると思われる。これらは、助動詞ケリの使用によって伝聞・推定によるものであることが同時に表明されるためか、当事者にしか知覚しえないような事柄―内々の事情や個人の心理などにまで立ち入った―までも自由に叙述されている。また、叙述の「視点」も自由に設定され、時にはまるで「見てきた」かのような生き生きとした描写もなされている。こういった叙述の自由さはキによるものには見られない。

次の「直接体験の記憶」は、表現主体自身が事象生起の現場でそれを見聞し、発話時にもそれを明確に記憶していることを示すもので、「社会的・公的事実」であるか「個別的・私的事象」であるかには関係なくキを用いて述べられる。大鏡において個別的・私的な

出来事をキによって述べてある場合、それは表現主体自身がその場に居合わせて目撃したものであると推定される。そうした叙述はほぼ表現主体自身の立場を「視点」とし、限定的になされており、ケリによる叙述のような自由さはない。

次の「同時代者の直接体験の記憶」は、客観的事実としては表現主体が直接目撃して確認したものでなくとも、社会的・公的に当時の世間に広く流布し、人々がそれを「事実」として受け入れた事柄である場合、同じくその時代に生きていた者として、自身が直接目撃した事象に準ずる確実な情報として受容し、「当時は確かにうであつた」という記憶として発話時に意識され、キによって述べられたものであると考えられる。大鏡においてはこうした例はかなり多い。例えば、

寛和二年丙戌六月廿二日の夜、あさましくさぶらひしことは、人にもしらせさせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道させたまへりしこそ、御年十九。よをたもたせ給事、二年。そのち廿二年おはしましき。あはれなることは、おりおはしましけるよは、ふちつぼのうゑの御つぼねの小戸よりいでさせたまひけるに、ありあけの月のいみじくあかかりければ、

(以下略、一―花山院、世次の会話部分、五一ページ)

という例など、「御出家入道させたまへりし」「廿二年おはしましき」という世間に広く知られた公的事実については、おそらく世次自身その出家の場や崩御の場に居合わせて確認したわけではないであらうにも関わらず、同時代者として、「確かにうであつた」と意識してキで述べているわけである。また、そうした叙述はあくまでも同時代者としての一般的な言及にとどまることになる。対して「あはれなることは」以下はケリを用いて伝聞によったものである

ことを表明しつつ、出家退位事件の顛末を当事者の心理やセリフを交えながら自由に生き生きと述べているのである。

以上全ての用法について説明した。

大鏡では、前述したような様々な事象―前時代か同時代か、表現主体の直接体験か伝聞か、社会的・公的事実か個別的・私的事象か―が複雑に交錯して叙述されている。列伝体形式のため時代的にも前後する事象が述べられるし、時代的に同時期の出来事であっても、公的事実を述べた後で個々の挿話的事件が語られ、しかもその挿話的事件についても表現主体の直接見聞したものと伝聞によって知ったこととの両者の場合が存在する。そのため、それらの事象の叙述に用いられる助動詞は、あるときはキ、あるときはケリと、目まぐるしく移り変わる。その様相は、もはやキとケリの意味・機能の差異を理解できなくなった我々には、一見どういう原則によるものか把握しがたくなっている。しかしそれらは、私見のような観点に立つことで、整理し直すことが可能であると考えるのである。<sup>(注十)</sup>

(了)

## 注

一、拙稿「助動詞キ・ケリの機能―最勝王経古点・三宝絵詞・今昔物語集を資料として―」(『日本語論究2―古典日本語と辞書―、和泉書院、平四(一九九二)刊)及び「古代語における文章の『視点』と『体験性』―和泉式部日記におけるキとケリの使用を例として―」(『名古屋大学国語国文学』七二、平五(一九九三)・七月)、「蜻蛉日記における助動詞キ・ケリの用法について」(『名古屋大学人文科学研究』二三、平六(一九九四)・三月)を参照いただきたい。

二、平成五年九月四日、「名古屋・ことばのつどい」第一四五回例会において「蜻蛉日記における助動詞キ・ケリの用法について」という題目で発表した際、質疑終了後多門靖容氏より個別にこうした御批判を承った。

三、松村博司氏の解説(『日本古典文学大系』大鏡、岩波書店、昭三五(一九六〇)刊、一七ページ)に拠る。引用に際し字体を通用のものに改めた。以下の引用についても同じ。

四、時枝誠記氏『国語学原論』(岩波書店、昭十六(一九四一)刊)第一篇総論の五、「言語の存在条件としての主体、場面及び素材」(同書三八―五六ページ)を参照。

五、以下、大鏡本文の引用に際しては、岩波古典大系本における左ページ脇上に表示された小見出し「序」とか「頼忠(遵子 公任)」とか―とページ数で所在を示す。なお、会話部分の話し手を示す松村氏の傍注(重木)などを便宜上本文と同行にして引用した。

六、引用に際し、踊り字符号をそれが示すべき文字に改めた。以下同じ。七、引用に際し、本文において見せ消ちを示す、が左傍に付されている文字については、これらをとくに省略した。

八、こういった歴史的な事実については橘健二氏校注・訳『大鏡』(小学館日本古典文学全集、昭四九(一九七四)刊)の付録(年表)・(人物一覧)を参照させていただいた。また、文意の解釈に際しても同書を参照し、益するところ多かった。記して感謝申し上げる。

九、こういった場合も世次等は「同時代者の直接体験」として意識して述べたことも考えられるが、客観的な裏付けもなくそういった意識を前提として分類するのは本稿では避けることにした。

十、注八の橘氏の校訂された本文では、「やまひづきて」以下を会話部分とされている。同書二六五ページ。また、石川徹氏校注『大鏡』(新潮日本古典集成、平元(一九八九)刊)では、「御やまひいたくせめて」となんみえし」の部分の会話部分とされている。同書二〇四―二〇五ページ。

十一、このケリの用例は、筆録者の曖昧な記憶に基づくものとも考えられる。つまり、筆録者はこの時「誰が、どうしたか」という点について明確に確認していたわけではなく、漠然と何人かが注目して集まってきたようだったといった程度の記憶しかなかったため、ケリを用いて述べたとも考えられるのである。次の例も同様。

(世次)「(会話略)」といふに、「とはたれにか」といふ人ありければ、「いで、この高名の琵琶ひき。(以下略)」

(六―昔物語、二六四―二六五ページ)  
十二、引用に際し、本文において。印とし右傍に補入してある文字については、これらを本文に繰り入れた。

十三、注八の橘氏の場合(同書三六―三七ページ)、及び注十の石川氏の場合(同書一六―一七ページ)も同様であった。

十四、「とよ」「ぞとよ」については引用でなく単に感動のみを表わしている場合もあり、別に判断した。例えば

そのときは、ゆめときも、かむなぎも、かしこきものどもの侍しぞとよ。(四―兼家、世次の会話部分、一六八ページ)

という例など、「同時代者の直接体験」として分類した。

十五、近年、塚原鉄雄氏「作品大鏡の表現構成」(二松学舎大学大学院紀要『二松』第五集、平三(一九九一)・三月)は、大鏡の地の文、会話部分の表現について、ともに「助動詞『けり』で統括しない乙種構成の表現を基幹構成とし、助動詞『けり』で統括する甲種構成の表現を補助構成とする表現機構である。そして、補助構成は、基幹構成の挿入表現となる」という「共通の構成原理で表現されている」と述べられた(同氏論文一八三ページ)。塚原氏の御主張と私見とは、――  
①塚原氏はケリの統括する文とそれ以外の文とを対立するものと考えられるが、私見ではキの統括する文(直接体験の事象の叙述)とケリの統括する文(間接体験の事象の叙述)とを対立するものと見なし、キやケリの用いられていない文や述部は中立的なものと思えず(注一の和泉式部日記に関する拙稿参照)②塚原氏は両者の性質の違いを文

章構成上の基幹的な表現か補助的・挿入的な表現かに求められるが、私見ではキ・ケリの機能の差異に基づき、表現主体の直接体験した事象の叙述であるか否かに求める――といった点で異なると思われる。私見が直ちに塚原氏の御説を否定するものであるというわけではないが、具体的な用例の解釈という点では種々対立するものも多いと思われる。

#### 付記

本稿は平成六年六月十一日に「名古屋・ことばのつどい」第一五四回例会において「助動詞キ・ケリが示す『体験性』の差異について――大鏡を資料として」と題して発表した内容についてまとめたものである。その際出席された諸氏から貴重なご教示等を賜った。感謝申し上げますとともにそれらを本稿に充分に生かすことができなかったことをお詫びしたい。